

企業の枠を越えた議論

BIM IDEATHON

中核世代(Over 40)からのメッセージ



デジタル庁

上田 知季

現場の課題解決が出発点

「これが理想的だった。BIMを含むデジタル技術は、あくまでそれ自体が目的ではなく、課題を解決するための手段であり、やはり、「現場で解決したい課題は何か」という観点から出発することが重要だ(中略)。改め認識する必要がある。個社では、なげ、業界全体で知見を共有し、デジタル化が進むと、デジタル庁としても期待している。

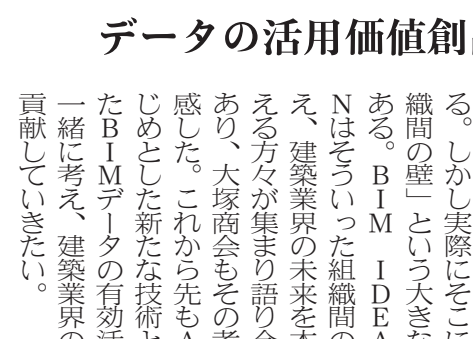


PLUS.1

高木 英一

継承・協創・挑戦の貴重な場

を重んじてい姿勢が、当社側ける「継承・協創・挑戦」に深く重なり、今回の協創に至った。参加者や観望者も可能性を共有できたことに感謝する。これから、きつめたデータを今後、業界全体にしっかりと還元していきたい。金・情報・人材の3つのリソースを、協創の場から、リソースの活用を促進し、心から敬意と謝意を申し上げたい。これからも、同様の挑戦の場には積極的に参加し、建設業の発展に貢献していきたい。



大塚商会

田中 元士

データの活用価値創出

建築に関わるすべてのステークホルダーが連携することで初めて、真の価値を発揮する。これは、まさに「生きた」データである。BIMは、これまで以上に、きつめたデータを今後、業界全体にしっかりと還元していきたい。金・情報・人材の3つのリソースを、協創の場から、リソースの活用を促進し、心から敬意と謝意を申し上げたい。これからも、同様の挑戦の場には積極的に参加し、建設業の発展に貢献していきたい。

IDEATHON 7年ぶり開催

BIMに携わる者同士が企業の枠を越え、未来に向けて意見を交わすことが開催の狙い。ボードメンバーとして7年ぶりの開催実現に尽力したのは安井謙介(日建設計)、大越潤(清水建設)、古川智之(久米設計)、山本敦(東畑建築事務所)の4氏。この取り組みに賛同する形で、PLUS.1と大塚商会が運営の下支え役として後援企業に名乗りを上げ、デジタル庁もオブザーバー参加した。中核世代の40代には総務グループが参加し、5グループに分かれ、建設DXのあり方を議論し、業界改革の可能性や次のステップにつながる具体的なアイデアを出し合った。

PLUS.1株式会社
株式会社大塚商会
日刊建設通信新聞社

協賛企業

企業の枠を越えてBIMの未来を考えるイベント「BIM IDEATHON(アイデアソン)」が、7年ぶりに開かれた。次代を担う若手世代のUnder 40(40歳未満)と中核世代のOver 40(40歳以上)が、日頃の業務でBIMと向き合う中で感じている思いを共有し、進むべきBIMの未来について意見を交わした。2026年春から確認申請ではBIM図面審査、29年春からはBIMデータ審査が動き出す。まさに日本のBIMが新たなステージに踏み込もうとしているタイミングでの開催となった。企業がDX推進に乗り出し、その基盤を成すBIMデータの利活用は多様な広がりを見せようとしている。その先導役となる中核世代のO40は到来した流れをどう受け止め、次の時代にどうつなげようとしているか。IDEATHONに参加したO40のメッセージを通してBIMの未来を描いた。



専門の垣根を越えて



日建設計

青木 隆広



安藤ハザマ

岡田 隆司

BIMの未来はデジタルツインの進化によるSociety5.0の実現である。現在は建物の設計・施工・維持管理段階でBIMデータを活用し、建物品質の向上や業務プロセスの効率化に留まっている。今後はBIMデータがデジタルツインとして価値を高め、サイバー空間とフィジカル空間の融合によってデータ連携・蓄積・活用されることで、社会がより便利・快適になることを期待する。

データからの建設にシフト



清水建設

飯田 洋二

BIMは建設業のシミュレーターである。多くが一品生産の建設業ではBIMデータを入力するため多大な努力と時間が必要となり、現時点ではシミュレーターとして成立していない。しかしAIの進歩により、人手間的大幅な軽減が予想される。近い将来「図面からの建設」から「データからの建設」というパラダイムシフトが起こり、施工が著しく効率化されBIMがその中心になる。

誰もが直感的に捉える未来



佐藤総合計画

櫻井 恵子

BIMによる設計や情報管理の可能性を日々実感している。今後DXを積極的に取り入れ、建物情報が設計・施工・運用の全段階でリアルタイムに共有され、誰もが直感で捉えられる環境が整う未来を目指している。こうした環境のもとで意思決定は誰かになり、各部門の協働も円滑に進むことで、建築プロセス全体が創造的かつ効率的に進化する社会の到来を信じている。

眠れるBIMの覚醒



三菱地所設計

石橋 紀幸

BIMに格納された情報は、現場・設計・発注者が使いこなせない『眠れるデータ』であった。だが、AIで属性や用語を紐づけることで、各情報を引き出し、これを元に対話できる環境が整いつつある。BIMを『活かせるデータ』とするために、価値と公開情報を見直し、「産業基盤の更新」を進めることで、人の創造性と判断力が生きる建設産業へと進化できると考える。

メリット享受できる未来



大塚商会

内田 竜哉

建設業のDXに伴い各種技術が日進月歩で進化中、BIMまたはBIMの関連技術を活用できるユーザーとできないユーザーに生じる格差を懸念している。ExcelやWordのように「誰もが普段使いできる状態」が望ましく、その理想と現実のギャップを埋める手段としてAIの発展に期待したい。スキルに関係なく誰もがBIM活用のメリットを享受できる未来であってほしい。



人はより創造的な業務に



ダイタン

茂 拓

建設業界におけるBIMの未来は「AIと人の分業化」に向かっている。設計段階では生成AIが膨大な過去事例から最適な建築計画を導き、施工段階ではAIが干渉検証や工程調整を担い、現場での意思決定を支援する。維持管理ではIoTと連携し、予測保全や省エネ制御により高度化する。AIが得意とする領域はAIに委ね、人はより創造的な業務に集中できる未来を期待する。

新たなステージに向けて
次代つなぐ思い共有



石本建築事務所

菅原 雄一郎

AIによって描かれる空間は現状では想像の域を超えない。今後BIMなどから創出される建築データの学習によって、空間・情報・身体スケールが結びつき、さまざまな要件に対するきめ細やかなエクスペリエンスデザインができるようになる。クリエイティブなオープンデザインプロセスによる新しい建築を実現するために、BIMは重要なプラットフォームとなりえる。



佐藤総合計画

中島 慎一

BIM化された都市のビッグデータをAIが解析し、建築や維持管理の最適解を提示する未来が増える。設計者は感性と倫理観をもってAIを活用し、創造的判断を行う。BIMを活用し、敷地内の空間体験や環境性能の検証だけでなく、敷地を超えた予測を通じて、社会に持続可能な価値を創出する。未来のBIMは、人とAIが協働し、効率と豊かさを両立する都市を築く基盤となる。



若手世代(Under 40)

8月開催のU40にはゼネコンや設計事務所などから64人が参加した。8グループに分かれたグループ討議では日頃、BIMやDXに取り組む中で感じているギャップを共有し、それを乗り越える方策やアイデア



日建設計

安井 謙介

IDEATHONは起爆剤

た95年現任のBIM推進、BIM確認申請、言の標準化が進んでくると生成AIの登場により、建設業のDX潮流は加速するだろう。U40では若手が他業界の事例を踏まえて未来像を再考し、O40では中核世代が現実的なDXの方向性を議論した。建設DXの鍵はBIMであり、法令に基づく規定や慣習のデジタル化にいたるまで、世代を超えた協働で脱する必要がある。IDEATHONは、建設業のHACKATHONはの発案を促す起爆剤である。

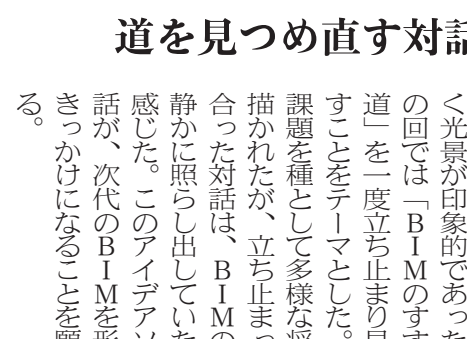


清水建設

大越 潤

企業横断で将来像を再定義

情報連携の断絶は依然として残り、BIMの価値を十分に引き出せていない。前回の参加者が、次の中核として活躍するなか、次の10年をどう築くかは、現代を越えた課題である。今回、若手に加えて中核世代以上が一堂に集まり、業界を超えた協働で、未来像を再定義する。企業横断で将来像を定義する必要がある。特にBIMは、建設業の基盤となる鍵であり、本企画がその意義を深めることになったことへの意義は大きい。



久米設計

古川 智之

加者も多し、それぞれ現場で抱える課題が連鎖し、新たなアイデアと連帯感が生まれていく。光が印象的であったU40の回は、「BIMの未来をつむぐ道」を度々止まり見つけ直すことをテーマとした。現状の課題を種として、未来像が描かれたが、立ち止まって向き合う対話は、BIMの未来を静かに照らし出していくことが、次のBIM形成のきっかけになることを願っている。



東畑建築事務所

山本 敦

7年ぶりのIDEATHON、U40とO40の2つの様子を、日頃とは異なる視点から、BIMやDXの未来を考える場となった。U40では、社外の同世代との交流を通じて固定化した前意識を離れ、自由闊達に構想を広げ、新たな発想が次々に生まれる様子も映った。同時に、新たなネットワークも育まれ、今後の業界を共に考える心強い仲間が増える機会となった。U40では豊富な提案を、実案への道が具体化して、企業文化や制度変革を促す。未来志向の多様な価値観があることこそ、この時代のBIMの発展へつながるべく、改めて意識したい。

未来志向の多様な視点

